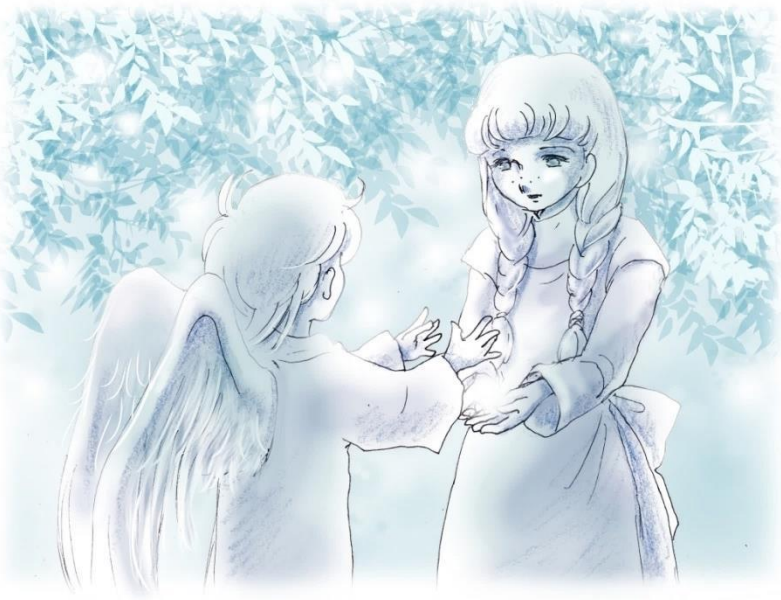
風の末裔シリーズ・４thシーズンの３

～エノシラ～



©西風そら

http://nisikaze.sakura.ne.jp

～欲しいモノ～

蒼の里の、のどかな昼日中。

「シンリィー！　シーンリィ――!!」

すぐにいなくなる目の離せない子供を捜して歩くナーガの声は、里の風物詩になっていた。

「またいなくなったのか？　全く首に縄でも付けときゃいい」

執務室の前で指を組んで伸びをしていた、ガッシリ肩幅の広い男性が、呆れた声で言う。

「まさか、山羊の仔じゃあるまいし。昨日お腹を壊して、苦い薬を飲ませたから、ヘソを曲げたのかもしれません」

ナーガは心配顔で生真面目に答えた。

男性は、さらに呆れて、ちょっと肩をすぼめる。

「ナーガ…、なあ、お前さん、あの子にちょっと手間を掛けられ過ぎてやしないか？」

体型もしゃべり方もノスリ長にそっくりになって来た彼は、ノスリの長子…、名をホルズという。長の弟子としての修業を収め、今は執務室の大机を預かっている。七つの時ノスリ家に預けられたナーガにとっては、何かと面倒を見てくれた、兄貴的存在だ。

「はあ…、言葉を覚えれば、修練所に通わせる事も出来るんですが…」

里へ来て四ヶ月。普通の子供なら、とっくに馴染めている頃だ。事実ナーガも、里へ来た年の夏草の頃には、他の子供達と遜色なく元気に駆け回っていた記憶がある。双子の妹のユーフィなんか、里へ来た翌日から物怖じせず、我が物顔だった。

しかし、シンリィはいまだに、迷い込んだ雛鳥のように、不安気で落ち着かない。西風のシドとソラがいた間はまだご機嫌だったのだが、今は二人とも一時帰郷で不在だから、余計に不安定なのだ。

言葉を知らないせいもあるのだろう。けど、ナーガがいくら教えようとしても、まず口を開かない。

こちらの意思を汲み取る事は出来るが、それは言葉を分かってではなく、表情や手振り、或いは触れる事で、実に見事に解するのだ。それはそれで七つの子供にしては凄い事なのだが。

けれど、『自分の意思をヒトに伝える』事が出来ないのは、七つにもなる子供としては、とっても困る。本人は意外と困らないのだが、周囲が困る。

「七年間、言葉なく育ったとしても、この四ヶ月はナーガが話し掛けながら暮らしたんだろう?」

地声の大きなホルズが、ちょっと声を潜めた。

「ナーガ…、あの子は七つにしては、ちょっと…、その…、頼りない。仮にも七つっていうと、修練所に通い始めて、秋には人生を共にする馬を宛がわれる。お前さんは長になろうと決意した。そんな年だ」

ホルズが遠回しに言いたい事は解る。里の皆も何となく囁いている事だ。悪魔は、子供の脳ミソも食い潰してしまったんだろう…と。

「なあ、ナーガ。お前さん、長になるまでまだまだやっとく事が山積みだ。シンリィの事は妹に任せて、自分の事に専念した方がいいんじゃないか?」

今はホルズの末妹が、シンリィの母親代わりを引き受けてくれている。しかし正直、引き受けた事を後悔している感じで、それもナーガの悩みの種だった。

「その、アイツの事だが…」

悩めるナーガにお構いなしに、ホルズはズイッと迫った。

「ちっとやそっとで、よく知りもしない子供の母親代わりなんぞ引き受けないぞ。あいつ、それだけ、お前さんを憎からず思っているってコトで……」

「あっシンリィ!」

ナーガは話をぶった切って、ホルズの横をすり抜けてダッシ

ュで逃げた。シンリィを見つけた訳じゃない。話が面倒な方向へ行きそうだったからだ。

大長もユーフィもいなくなった今、長の血筋を引く者がナーガとシンリィだけになってしまった。里の老人達が持ってくる山のような縁談にも辟易しているのに、最近はノスリやホルズまで、隙あらば話を差し込んでくる。

「冗談じゃない…」

でかい羽根を持った小悪魔だけでも手に余しているのに、これ以上ヒトの面倒を見る余裕なんかあるもんか。そう、女性なんて、なんだかんだいって、結局、面倒をかける権化なんだ……。

＊＊＊

さっきも来たんだが、もう一度、里の奥の円の焼け跡に来てみた。

「いないか…」

「ナーガ様…?」

細い声に振り向く。

まだ色の薄い前髪をきれいに切り揃えた少女が、絞った洗濯物が詰まったカゴを抱えて立っていた。そばかすだらけの、鼻より頬が高いポッチャリ顔は、見覚えがある。

「あー、…えーと……」

「エノシラです。先週名前を頂いたばかりの」

「ああ、エノシラ」

ノスリ家の親戚筋の、何度か見掛けた事はある少女だ。

「何か?」

「いえ……」

少女は口ごもった。用事もないのに声を掛けられるのは昔っから慣れているが、余裕のある時だけにして欲しい。

「シンリィ、見掛けなかった?」

「ああ、あの子供? ごめんなさい、今日は見ていないです…」

「そう、ありがとう」

立ち去ろうとする背の高い男性に、小柄な少女は凄く勇気を振り絞って声を掛けた。

「あの、あの…、ナーガ様」

「はい?」

「今、ちょっと、お話していいですか?」

「…ああ…、いいですよ」

ナーガは肩を降ろして少女に向いた。どんな些細な…ナーガにとって脱力するような事でも、きちんと向き合って聞くのは、彼の生業(なりわい)だ。

エノシラは、長いおさげを後ろに垂らしてナーガを見上げ、

姿勢を正して息を吸った。
「あの…あたし、助産師になる事にしたんです。春から産婆のオウネお婆さんに弟子入りして、色々習っているの……その……」
ナーガが黙って、話の核心はまだかと待っているので、少女はしどろもどろになって来た。
「今日もこれから、オウネお婆さんの所へ行くの…。まだ、雑用しかやらせて貰えないけれど…。毎日、叱られてばかりで…」
…ああ、この少女は、将来の道を決めて、憧れの次期長様に報告したかっただけなんだ。彼女にしたら、大切な事なんだろう。
「険しいが、良き道を選びましたね。今は、こつこつ頑張りなさい。何事も、近道はありません。頑張るヒトの前には必ず道が開けますからね」
ナーガは判で押した台詞を優しく言った。しかし、少女は瞳を大きく開いて、ナーガを凝視した。
「本当…?! 本当にあたし、助産師になってもいいんですか?!」
「…??」
「お怒りを貰うかと思って…、ずっと、心配で…」
「…??…貴方の目指すものに、口を差し挟める者なんかいないでしょう?」

よく分からず、ありきたりな事を言うナーガに、少女は瞳を潤ませて手を合わせた。
「あ・ありがとう…、ありがとうございます…。今日、ここへ来て良かった…」
「…？？」
その時、昼の鐘が鳴り、エノシラは慌てて カゴを抱え直した。
「大変！　遅れちゃう！」
身を翻しながら、もう一度ナーガを振り向く。
「挫けそうになった時、ここへ来て、自分の行き先を確かめるんです。母さんの出来なかった続きを、出来るようになろうと。お会い出来て、良かったです！」
ナーガは雷に撃たれたみたいに茫然と少女を見送った。彼女の母親が誰だったか…、今やっと思い出したのだ。

ユーフィがシンリィを産み落とした時…、悪魔の黒斑を持って生まれた赤子を見て、一番パニックを起こしたのは、助産師の一人…エノシラの母親だった。
とても妹には聞かせられない言葉を泣き叫ぶ彼女を抱きかかえて産屋から遠ざけ、パニックが伝染した他の助産師達のケアをしている間に、妹と赤子は姿を消した。
考えたってどうしようもない。時間は戻せない。助産師を責めるのは筋違いだ。黒死病が怖いのは当たり前だ。
頭で分かってはいるのだが、ナーガは出産に立ち会った女性達に、よそよそしくなった。それどころか、女性全般に……、何と言うか……、幻滅してしまったのだ。
そう言うと大袈裟なのか？　しかし、もともとあまり接しなかった女性ってヤツと…全く関わりたくなくなった。
出産という、男性には立ち入れない厳粛な現場で、あんな修羅場に遭遇してしまったんだから、心の外傷の一つも負ったんだろう…と、自己分析してみたが、分かっていてもどうしようもなかった。
里の老人達があからさまに縁談を勧めて来るのも、何だか物悲しくて、余計に女性を遠去けてしまっていた。

エノシラの母親も黒死病で亡くなった。ユーフィの出産の時ではない。あの時は結局、産婆も助産師も、誰も感染しなかった。
里に悪魔が降りたのは、それから二年近く経って…人間界の病禍が下火になって、油断が出た頃だった。里の端からいきなり広がった災厄は、多くの命を削り取って行った。
羅患者を隔離する場所に、どうしても、病人を世話する、覚悟を擁した看護人が必要だった。ノスリ長の妻のフィフィが、

先頭で名乗り出た。患者の中には彼女の息子や娘みたいな教え子達が大勢いた。フィフィはずうっと皆の『お袋さん』だった。

エノシラの母親も、進んで看護に加わった。彼女もまた、戻せない時間に苦しんでいた一人だったのかもしれない。

その娘のエノシラが、母と同じ助産師になると言う。隔離場所に向かう母親は、小さい娘に何を伝えたのだろう？

何とも言えない気持ちになった。

あの少女ですら、傷を乗り越え、前を向いて歩き出している。自分はいつまで足踏みしているんだろう…。

＊＊＊

エノシラはカゴを胸に抱えて全力疾走していた。お昼の鐘までに戻りなさいって言われていたのに。産婆のオウネお婆さんは、かなり怖くて厳しい。

修練所の廐(うまや)横を走り抜けた時、暗がりの通路に、薄緋色がチラと見えた。

「あの子…」

ナーガが探していた羽根の子供がそこにいる。しかし、自分は急ぐ。あそこなら直、ナーガ様が見つけられるんじゃないかしら？

駆け去ろうとした時、子供が一人ではないのに気付いた。里の子供…同い年かちょっと上くらいの男の子五、六人に、囲まれている。

「…！」

大きい子がシンリィを壁に向けて押さえ付けている。後の子供は羽根を引っ張って、無理矢理広げようとしていた。

「あ、あんた達、何やってんの！」

エノシラはカゴを抱えたまま、思わず踏み込んだ。子供達は一斉に振り向いた。

「何って、羽根を見せて貰おうと思って…」

子供が目新しいモノに興味を持って、遠慮なく手を伸ばすのはままある事。本人達に罪の意識はない。

「だって、その子、嫌がってるじゃないの。人の嫌がる事をしてはいけません！」

名前を貰ったばかりのエノシラは、頑張って子供達を諭した。

「えー？　だって、こいつ嫌がってないモン」

名前を貰ったばかりの娘のたどたどしさを、子供は簡単に見透す。

「嫌だったら言うだろ。やめて！　とか」

「言えない子供だっているんです！」

エノシラは更に頑張って子供達を睨み付けた。

睨みが利いたのか、羽根を引っ張っていた一人が手を離し、

それを見て、もう一人も手を離した。真ん中で背中を押さえていた子が離れると、羽根の子供はその場にペタンとしゃがみ込んだ。振り向くでもなく、泣くでもなく、無言だ。
　エノシラも、この子供は遠くから見掛けた事があるだけで、接するのは初めてだ。
「あんた、大丈夫…？」
　子供は言葉に何の反応も示さず、地べたを見回して、ノロノロと、散らばった羽毛を拾い集め始めた。
「……」
「な、変だろ、そいつ」
　真ん中のおっきい子が、皆を代表するように言った。
「俺達、仲間に入れてやろうとしたんだ。ホントだよ。でも、何にも言わないんだ」
「蹴り玉やオモチャも、分けてやるって言ったのに」
「……」
「そんで、今度は羽根を見てやろうと思ったんだ。教官センセが、ヒトと仲良くなろうと思ったら、まず、良い所を見付けて誉めてあげなさいって言ってたから。んで、広げて誉めてやろうとしていたの」
　エノシラは溜め息を付いて、子供達の目の高さにしゃがんだ。オウネお婆さんに大目玉を食らうのは覚悟した。
「そうなの…。でも、ね、この子は、羽根を誉めて貰いたいのかしら？」
「…んーと…」
　子供達は顔を見合わせた。
「もし、あたしだったら、『してやる、してやる』って、取り囲まれたら…、びっくりするだけで、何も嬉しくないと思う。あんた達だってそうじゃない？」
「蹴り玉をくれるって言われたら嬉しいよ！」
　左の子が子供らしい屁理屈で抵抗した。
「そう…ね……」
　エノシラは考え込んだ。
　子供達は、戸惑いの顔を見合わせた。大人って、いつも決めつけて叱るばかりで、こっちが言う事を真に受けて考え込んでくれる大人なんて、初めてだ。
「うん、そう！　欲しいモノをくれるって言われたら嬉しいよね。では、誰かを喜ばせようと思ったら、そのヒトが何を欲しいのか考えれば良いと思うな」
「そんなの分かんないよ。こいつ、喋んないし」
　子供達には不満な答えだったようだ。
　その子供達の目の前に、緋(あか)い固まりが差し出された。

「？？」
シンリィが両手に拾ったふわふわの羽毛を、子供達に向けて突き出しているのだ。
なんて真青(まさお)な瞳をしているのかしら…！　エノシラは一瞬、時と場所を忘れた。

「お前、何だよ…」
子供達は、訝(いぶか)しがって後退りした。
「くれるんじゃないかしら？」
「はあ？」
「羽根を引っ張ったから、羽根を欲しがっていると思ったのよ。ね、あんた、そうでしょう？」
シンリィは相変わらず真面目な表情で両手を突き出している。
「貰ってあげなさいな」
しかし子供達は顔を見合わせて躊躇している。
「どうせくれるなら、そんなゴミみたいなのじゃなくて、そっちの長いのがいいな！」
左の子が無遠慮に、シンリィの背中の羽根の先端の、大きな風切り羽根を指差した。
「あ、俺も、そっちがいい」
「俺も、俺も！」

「あんた達…」
エノシラが呆れて今一度子供達に説教をくれようとした時、シンリィは黙って左手で背中の羽根を引っ張って、右手で引き抜こうとした。
「あんた、よしなさい！」
エノシラが制止の手を出す前に、シンリィの右手は後ろから大きな手で掴まれた。
「シンリィ、それは、駄目だよ」
「ナーガ様…！」

＊＊＊

長様の執務室の偉い大人の出現で、子供達は緊張した。
「君達…」
「は、はいぃ・・」
「この子と遊んでくれていたの？」
「は…はいっ、うん、そう、そうですっ」
エノシラはキッと子供達を睨んだが、子供達は目をそらした。
「そう…、この子は、言葉のない遠い国から来たんだ。言葉を覚えるまで時間がかかる。それまで、いろんな事、大目に見てやってくれるかい？」
「は、はいっ」
子供達はゲンキンに良い返事をした。

昼休みを終える鐘が鳴って、子供達はお辞儀をして、修練所の建物へ戻って行った。
「さてと…」
ナーガは、色々言いたそうな少女が抱えた大きなカゴをヒョイと取り上げ、外へ向いて歩き出した。
「貴方をオウネお婆さんの所まで送るとしましょう。時間に遅れた理由を僕が説明すれば、罰を受けずに済むでしょう」
「ナーガ様っ」
シンリィを伴って、先に立ってスタスタ歩くナーガに、エノシラは勢り立って追い掛けた。
「あの子供達っ…、その子を苛めていた訳じゃないんですよっ。いろいろと下手くそだっただけで…」
「分かっていますよ」
ナーガは廐を出た所で振り向いて、エノシラを待った。
「早くにそこに来ていました。貴方が飛び込んだのが見えて」
「…?! それで…見ていたんですか? あたしがあたふたするのを?」
「いえ、感心していたんですよ」
エノシラが追い付くと、ナーガはまたスタスタ歩き出した。歩幅が大きいからシンリィはチョコチョコと小走りだ。
「貴方、手を出さないで、子供達に言葉で分からせようと…、自分の意思でシンリィから手を離させようとしていたでしょう。それで、凄いなあと」
「ス、スゴイ?」
「僕だったら、まず手が出て、シンリィから子供達を引き離すでしょうね。で、苛めていたんだと誤解したまま、さっきみたいに当たり障りのない事しか言えない。でも、貴方は子供達と目線を合わせて、真剣に向き合っていた。それで、凄いなあ、見習わなくちゃ…と」
「み、見習う? ナーガ様が?」
「はい、僕は、このたった一人の子供とすら、まだ向き合えないでいる…」
「……」
歩きながら、エノシラはこの立派な大人の端正な横顔を見上げた。このヒトが、あたしを、見習う…??
「いえ、結局、うるさがられただけだわ。誰も分かってくれなかった…」
エノシラは、耳まで赤くなりながら、俯(うつむ)いて言った。
「今すぐは分かって貰えなくていいんですよ」
ナーガは少女に向いて、優しく言った。さっき、焼け跡の前で話した時の優しさと、全然別な感じの優しさだった。

「貴方に言われた事をカケラでも覚えていれば、いつかふと、ああ、そうだったか…と、分かって貰える時が来るかもしれません。そう考えたら、今言う事は決して無駄じゃありませんよ」

エノシラは、洗濯場のお姉さん達がこのヒトの噂でキャイキャイ言うのが、今やっと理解出来た。一言掛けられる度にドキドキする…。

助産院の入り口で、怖い顔をしたオウネ婆さんが待っていた。

「エノシラ！　真面目にやる気がないのなら…」

「まあまあ」

ナーガがエノシラの前に立ち、彼女が子供を助けて遅れた事を説明した。あと、この娘の見上げた正義感は、指導者の日頃の教育の賜物ですね…と、ヨイショもしておいた。

ナーガが婆さんの長話に付き合っている間、エノシラは洗濯物を干していたが、ふと視線を感じた。

シンリィが見上げている。

「…えと…どしたの？」

戸惑うエノシラに、シンリィはさっきの羽毛を両手で差し出した。

「…？…くれるの？」

エノシラが両手を出すと、小さな指で、掌に数枚の羽毛を乗せてくれた。

「…きれいね…」

握りしめていたせいか、ほんわかと暖い、薄緋色の羽毛…。

ナーガがシンリィを呼んで立ち去った後、オウネ婆さんは挨拶もしないで突っ立ったままの弟子に喝を入れようと近寄って、驚いた。

「おやまあ、お前、エノシラ…、どうしたね？」

少女のそばかすの頬には幾筋もの涙が伝っていた。

「あ…、ああ、…すみません…」

「……どうしたね…」

老婆は、弟子の掌の緋色の羽毛を見ながら、もう一度聞いた。

「分かったんです。何故だか、今、急に、分かったんです」

「何がだね」

「母さんが、看護をしに行くって、うちを出る時…。黒死病の隔離場所へ」

「…うむ…」

「あたし、小さかったから…、腹が立って、しょうがなかった。何で、母さんが行かなきゃならないの？　あたしは大事じゃないの？　って」

「……うむ…」

「母さんは、命を大事にする人生を、まっとうしたかったの。命を大事にするっていう姿をあたしに見せたかったの」
「……うむ…」
「今、急に、霧が晴れたみたいに…、分かったんです！」
オウネ婆さんは、弟子が涙を流し終えるのを待ってやった。
里の口塞がない噂が、幼い少女を傷付ける事もあったろう。しかし、その母の姿を見ていたからこそ、この娘は傷を越えてここへ来たのだ。

＊＊＊

「ただいま戻りま……した…？」
執務室の御簾を開けて、部屋に入ったナーガだったが、中の空気が不穏なのに何となく気付いた。大机の向こうでノスリとホルズがしらじらしく明日の天気について話している。絶対、自分が入って来るまで、別の事話してたんだ…。
「シンリィ、いました」
「あ、ああ、いたか。よかったな」
「昼からの仕事に、連れて行きます」
「ああ、そうだな」
「いや、親父、いつまでも仕事に子供を連れ回すのもどうかと思う」
ノスリはナーガに甘いが、ホルズは兄貴代わりの遠慮無さで

意見した。
「でも、やっぱり、シンリィは目が離せないです。今も…」
「どうした、何かあったのか？」
「修練所の子供達に、羽根が欲しいって言われて、何の躊躇もなく風切り羽根を引っこ抜こうとしたんです」
「…そりゃ…また…」
その意味が分かるノスリは言葉に詰まった。
羽根の真実を知っているのは、今ではノスリとナーガだけだ。今後、誰にも伝えるつもりはない。
「ほお、そいつは気前が良いな。風切り羽根は抜けたら生えて来ないのか？」
ホルズは呑気に聞いた。里の者には、羽根は遺伝で、ごく稀（まれ）に生えて来るモノ…位に思わせている。
「ある有翼人が昔、羽根が折れただけで命を落としそうになったらしいです」
「ふむぅ…」
ホルズは顎を撫でながら納得した。そんなら、シンリィから目を離せない気持ちも分かる。
「すみません、あまり危なくない仕事を優先して回して貰っているの、分かっています」
「おお、気にするな。最近、身体を動かすようになって、腹回りの肉が落ちた。有り難い事だ」
ノスリが豪快に笑って、ナーガは会釈して、シンリィと共に馬繋ぎ場へ向かった。

二人が十分離れたのを見計らってから、ノスリは大机に両肘を乗せて、ホルズに顔を寄せた。
「で、誰だっけ、その…」
「エノシラだよ。叔父方の遠縁の。親父が先週、名前を授けたろ？」
「…というと？　…ああ！　あの娘！　何と言うか、その…」
「癒し系！」
「そうそう、そんな感じ。その癒し系が、ナーガと親しげに歩いていたっていうのか？　あの、女嫌いのナーガと」
「ナーガ限界説と言われていた二十秒を大きく越えて会話していたって。しかも、荷物まで持ってやって」
「おお！　そりゃ、快挙だぞ！　しかし、ここからが大事だぞ、ホルズ」
「分かってるよ。今までは早過ぎるタイミングで焚き付けて、スタートラインに立たせる事すら出来なかった」
「そうだ。だからだな、ここは大事にだな…、大事に大事に…」
「遠くから、邪魔を阻止しながら見守るんでしょ。俺も、兄弟

姉妹にネットワーク張って、暖かい包囲網を形成するぜ。何たって里の未来が賭かってる」
「ああ、頼んだぞ。いやあ、大家族作っといてよかった。こういう時、身内の結束が物を言うなぁ。所でホルズ、その、エノシラだが…」
「目立つ娘ではないけれど、気立てはいいと思うよ」
「そこじゃなくて」
「あ？」
「尻はデカイか？」
「…えと？」
「子沢山の素質があるか？　って事だ」
ナーガの縁談が今まで壊れまくっていたのは、案外ナーガの女性嫌い以外の原因もあったんじゃないのか…？　と、ちょっとだけ思った、ホルズだった。

～あげたいモノ～

エノシラはここの所、不満に思っている事がある。
従兄弟や叔父叔母に、めったやたらお使いを頼まれるのだ。オウネお婆さんにコキ使われてヘトヘトで帰って来るのに…。
用事の先は、決まって執務室のノスリ長様かホルズ叔父様。
そして届け物を持って執務室の御簾をくぐると、必ず二人はいなくて、ナーガ様が留守番しているのだ。
「叔父様達ってそんなに忙しいのかしら？　用事先の相手がいる時間くらい確かめとけばいいのに…」

ナーガはここの所、困ってしまっている事がある。
夕方の鐘が鳴ってから、…要するに、エノシラがオウネ婆さんの所から帰る時間になると、ノスリとホルズがそわそわし出して、やれ見回りだの寄り合いだの、何やかやと理由を付けて執務室からいなくなるのだ。
そして、風呂敷包みを抱えたエノシラがやって来る。
「わざとらし過ぎるっ！　画策するならするで、もうちょっと僕に分からないように、スマートに出来ないのかっ?!」

こんな夏冷えの篠付(しのつ)く雨の日は、勘弁してやればいいのに…。
「こんにちは・・」
外で緊張の声がする。
「どうぞ、お入り」
雨合羽のフードを降ろして、丸顔のそばかす娘が御簾の隙間から顔を出す。

「ノスリ長様…は？」
「集会所に将棋（シャタル）を指しに行きました。約束があったそうで」
「あら？　将棋仲間の兄叔父様からのお誘いを言付かって来たのですが？」
「まったく、つじつま位合わせとけばいいのに」
「はい？」
「いや、いいんです。ご足労でしたね、雨の中」
「いえ、では、碁会所で会えていますね。あたしは帰りま……ああ――っ！」
エノシラは雨合羽を打ち捨てて、執務室に飛び込んだ。
「ど、どうし…？」
ビックリ仰天のナーガを通り越して、三歩で部屋を横切り、奥の大机に走る。そばかす娘が手を伸ばすより、羽根の子供が机の上の墨壺をひっくり返す方が、一瞬早かった。
「ああ・あ・あ～！」
間に合わなかったエノシラは、自分のせいみたいに情けない声を出した。
机に墨が広がり、シンリィは真っ黒な両手を眺めてキョンとしている。更に何を思ったか、その真っ黒な手で、片側の書類の山に手を伸ばす。
「あっ、そっちの書類はヤバイ！」
「あんた、駄目よ！」
ナーガも駆け寄ったが、エノシラはそれより早く机を飛び越えてシンリィを抱いて止めた。
シンリィは大人しく止まり、ナーガは書類の束を持ち上げて、二人は溜め息と共に肩を下ろした。
「…書類、大丈夫ですか？」
「大丈夫ですけど…、貴方…」
エノシラの衣服の下半分は、机を拭いた形になり、黒い墨がベッタリ染み込んでしまっている。おまけに胸にくっきり小さいモミジみたいな両手形…。
「平気です。洗えば何とかなります」
「……」
「汚れついでにお掃除しちゃいますね。あんた、手を洗って来なさいな」
エノシラはとっとと雑巾を見付けて机を拭き始め、シンリィはナーガの所へ駆け寄って、罪の意識のない顔でほわっと見上げた。まったく……！
雨を幸い、シンリィに屋根から滴る水で手を洗わせていると、エノシラが合羽を羽織って出て来た。

「掃除終わりました。あたし、帰りますね」
「あ……」
ナーガは何て言っていいか、言葉が出なかった。エノシラは怒っている風でも悲しんでいる風でも、無理に明るく見せている風でもなく、無表情に事務的だったのだ。
「……ありがとう…」
それだけやっと言って、雨の中駆け去る少女を見送った。

「大馬鹿野郎オォ――!!」
執務室をほったらかしてほっつき歩いていた親子に、ハモって怒鳴られた。
「書類なんか書き直しゃあいいだろ？　何、最優先に庇ってんだ?!」
「唐変木もそこまで行くと笑えないぞ！　そこで、着替えさせるとか、色々、色々…、あるだろうがぁ～～!!」
「そんな事、出来る訳ないでしょう。第一、僕が何をしたっていうんです？　元はと言えば、シンリィが…」
「おお！　シンリィ！」
二人の大男は、シンリィを囲んで、両側から頭をガシガシ撫でた。
「お前は良い子だ。帰っちまいそうなお姉ちゃんを唐変木が引き留めないもんで、気を効かしたんだよなあ」
「シンリィをいかがわしい大人の物差しに乗っけないで下さい！」
脳を揺さぶられてクラクラしているシンリィを引き寄せ、ナーガは後ろ手で出口の御簾を開けた。
「ついでに言うなら、見えすいた画策はよして下さい。僕はともかく、エノシラが可哀想だ。毎日オウネお婆さんにシゴかれてヘトヘトになってんのに」
頼むからもうやめてくださいと、重ねて懇願して、ナーガはシンリィを伴って帰途に付いた。
残った二人のいかがわしい大人は、唐変木の言葉の最後の一節にだけ食い付いていた。
「可哀想とな！　あの、女性に無関心なナーガが！」
「親父、こりゃ、思ったより脈ありだな！」

＊＊＊

エノシラはぐったりと腫れぼったい赤い目で、夕べ遅くまで洗っていた衣服を干していた。
「はあ～…全然落ちてない…」
かなりな時間を掛けてこすったのだが、墨を落とすのはやっぱり無理がある。鮮やかなヤマブキ色の長衣に、墨の黒が無惨だ。おまけに胸に子供の手形…。

「よりによって…」
いつもの仕事着を洗ったのが雨で乾かず、仕方なくよそ行きの一張羅を着ていた昨日に限って…。
あの時は夢中で書類を守ったが、後からズンズンと後悔がやって来た。ショックのあまり、執務室で何を話して、どうやって帰って来たのかも覚えていない。あたし、なにか失礼をやらかしゃしなかったかしら?
しょんぼりとパオの裏で干した衣服を眺めている少女の所に、親戚の女性達が、慰めようと集まって来た。早くに父も亡くしているこの娘を、皆は何かと気に掛けている。イマイチな容姿の内気な娘だから、尚更だ。
その中に、シンリィの母親代わりを引き受けていた、ノスリの末娘もいた。
「あたしはナーガ様の花嫁候補から外れて正解だったわ。もれなくあの子供が付いて来るんだもの」
「あら、貴方はそれを狙って母親代わりを引き受けたんじゃなくて?」
「あんな子だなんて思わなかったんだもの。何をしてあげても一言も喋らないし、ちっとも可愛くない」
「そう? 悪魔に呪われていても、貴重な長様の血筋を引いた子供じゃない?」
「幾ら血筋が良くても、おつむがアレじゃね。ね、貴方も嫌だと思ったら、早いめにハッキリ断らなくては駄目よ」
「…は……?」
ぼぅっとお喋りを聞いていたエノシラは、ここで初めて自分が蚊帳の外ではない事を知った。
「あた…、あたあたあたしは…!」
どもりながら立ち上がって、それから、皆の後ろのパオとパオの間を見て、凍り付いた。
シンリィを伴ったナーガが、口を結んでそこに立っていた。
「……!!」
エノシラの視線で振り向いた女性達も、顔色をなくした。
ナーガは黙って、すうっとパオの影に消えた。
打ちひしがれて仕事場にやって来たそばかす娘に、オウネ婆さんは大きな風呂敷包みを手渡した。
「ナーガ殿が、今朝方持って来た。お前に渡してくれと。自宅の方へ持って行きゃいいのにな?」
「…?…」
包みをほどくと、古びてはいたが、丁寧な作りの薄桃色の絹衣装だった。
「ほお…」

驚くエノシラの後ろからオウネ婆さんが覗き込んで言った。
「懐かしい…」
「え?」
「ユーフィが少女時代に着ていた物だのう。よく喋る、お陽様みたいな娘じゃった」
「あっ…あの…!」
エノシラは包みを胸に抱えて立ち上がった。
「お休みをください! 一刻だけでも!」
「罰則を受ける覚悟があるのなら」
「はい! 幾らでも!」
少女はおさげをなびかせて、風呂敷を抱えたまま飛び出した。

執務室にナーガはいなかった。またシンリィがいなくなって捜しに出たのだという。
留守を預かるホルズは、今朝の顛末を知っていた。気に病むなと慰めてくれるのに会釈だけして、里の奥へ走る。
案の定、円の焼け跡の前に、ナーガは居た。
「あの……」
「……やあ…」
「あ、あの…」
「シンリィ、知らない…?」
「…すみません、見ていないです…」
「そう……」
「あの、あの…」
「…大丈夫ですよ…」
ナーガは静かに横顔を上げた。
「ああいうのに傷付かないよう、カワセミ長はシンリィに言葉を教えなかったんです」
「……!」
不意に、エノシラの目が熱くなって、涙がポロポロこぼれた。
「…? 何で貴方が泣くんです?」
「分かりません」
「……」
「あの子が傷付かないからって、大丈夫じゃないと思います」
「…どうして?」
「あの子の隣で、代わりに傷付くヒトがいるからです」
「……」
ナーガは黙って、焼け跡を凝視した。エノシラは、垣根があるように遠くから、風呂敷包みを差し出した。
「頂けません。こんな、大切な物」
ナーガはゆっくり振り向いて、ちょっとの時間、包みを眺めてから言った。

「僕じゃないんですよ」
「は…？」
「シンリィが…。しまってあったのを引っ張り出して、シンリィが…」
「……」
「まったく、何を考えているんだ、どうしてすぐにいなくなっちゃうんだ、あの子は…。いつも、いつも…！」
ナーガは疲れた感じで吐くように呟いた。
「あの、あたしも捜します」
エノシラはいたたまれなくなって、風呂敷包みを抱えたまま、その場を離れて駆け出した。

＊＊＊

ナーガは駆け去る少女を眺めながら、まだ動けずにぼうっと焼け跡に佇んでいた。
今朝方、ノスリとホルズに言われた事…。
「なあ、シンリィだが…、ちょこっとの間、山のお袋さんに預けたらどうだ？　シンリィも懐いているっていうし、お袋さんも喜ぶだろ？」
「…何の為に…？」
「里が、次期長としてのお前さんを、取り戻す為だよ！」
歯に衣を着せないホルズが声を大にして言った。胸に風穴を開けられたようなナーガを見て、ちょっと強すぎたと思ったホルズは、声のトーンを落として続けた。
「お前さんの身はお前さんだけのモンじゃないんだ。次期長のお前が子供一人にあたふたしていると、里の皆が不安になる。長って、そういう存在なんだ。自覚してくれ」
「……」
「それから、妹からの伝言だ。エノシラがいる所に、自分達が勝手に寄ってお喋りを始めただけで、あの子は何も関係ないっとさ」
「僕は、カワセミ長に、命掛けて、シンリィを託されたんです」
「なら、カワセミの為にも、シンリィが穏やかに暮らせる道を考えてやってくれ」
そんな会話に翻弄されている間に、シンリィがまたいなくなった。空を眺めてぼうっとしていたから安心していたのに。
話は改めて夜にする事として、ナーガはシンリィを探しに出たのだった。
里の奥の円の焼け跡…。シンリィはここからこの世に来た。全ての事に意味があるのなら、あの子の生まれて来た意味って何なんだ…？

エノシラは、胸に風呂敷包みを抱いて走っていた。まぶたに

まだ涙が残っている。
何だかとっても哀しい。ナーガ様はただあの子を愛したいだけなのに、どうして上手く行かないんだろう？
「…?!」
不意に、小さな羽毛がひとひら風に運ばれ、目の前に来た。風上は…、向こうの風景が、水底を通したように歪んで見える。
「結界の境目だわ…」
外へ出ちゃったんだ、あの子…。厩まで馬を取りに行こうか？でも、今なら、すぐそこにいるかも。
「ええい！」
エノシラは息を吸い込んで、結界を駆け抜けた。

景色が歪んで、水に流されるように身体が外界に押し出された。いきなり丈の高い夏草が視界を遮る。
しかし、少し先の草に、緋色の羽毛がくっ付いている。
「なんだって、外をこんなに平気でズンズン歩けるの？」
蒼の里で育ったエノシラだったが、物心付いた頃は、草原は悪魔の脅威に脅かされていて、外の世界を知らずに大きくなった。
外出が解禁されたここ何年かも、『外は怖いモノ』の意識が刷り込まれていて、進んで外に出る事はなかった。ましてや、馬に頼らず、徒歩で出るなんて、トンでもない事だ。
恐々と草をかき分けて行くと、目の前に小高い丘が現れた。上の方のハイマツに、点々と緋色の羽毛が見える。
「ここを登ったっていうの？　何でわざわざ…」
それでもエノシラはハイマツをよじ登りくぐり抜けして、ふうふう言って丘を登った。頂上の細かい瓦礫の広場にたどり着き、反対斜面を見て…、心臓が止まりそうになった！

赤い獣・・！
血のような真っ赤な野牛程もある獣が、空中をゆっくり円を描いて歩いている。首の周りのタテガミと蹴爪からは炎が立ち、銀の眼が妖しい光を放っている。普通の獣と違う?!
その円の中心に、羽根の子供が立っているのだ。こんな状況なのに子供は無表情に突っ立っていて、獣はだんだん円を縮め、柔らかそうな頬に鼻先を近付けている。
「や、やめてえぇ――!!」
エノシラは飛び出して、抱えていた風呂敷包みを狼に投げ付けた。勿論そんなのでこの獣を追っ払えっこない。でも注意は引ける。
「あ・あたしの方が、丸々してて、食いでがあるよ！」
獣がこっちを向いてくれれば、子供に逃げる隙が出来る。

しかし獣は、ほどけて落ちた風呂敷の中身を凝視していた。
「…ふうん…？」
獣は言葉を発した。
「お前さんは、これを、この娘にくれてやったっていうのか？」
シンリィの反応を待たず、獣は空中を歩いてエノシラに近寄った。
「ふうん…、ふうん…」
獣の鼻先がエノシラの頬をかすめる。

「ほおお！」
獣は感嘆の声を発して、三歩程下がった。
エノシラが歯をガチガチ言わせながらも、懐剣を抜いて振りかざしたのだ。
「あ・あっちへ行って！」
「物騒なモン持ってるな」
「刃物は助産師の基本だって、師匠が…」
「しまえ、しまえ。俺様に本気で相手して欲しいってんなら別だが？」
「…？」
「そこの、どチビと、たまたま会って、値踏みしていただけだ。心配すんな。こんなつまらんガキに用はない」
「…つまらん？」
「ああ、つまらん、つまらん。欲がカケラもない」
「…欲…」
「そう、欲！　ヒトの欲望は面白い。俺様の生きる糧だ」
獣の目的が血肉ではなさそうなので、エノシラはちょっと肩を降ろした。
「欲がないって…？　それは、良い事じゃないの？」
「良い事ォ？」
獣は口の端を上げて歯を見せた。
「欲ってのは生きるエネルギーだ。生きとし生きる者の証だ。お嬢ちゃん！」
獣の妖しい銀の目で見据えられ、背中に鳥肌が立った。
「キレイなおべべが着たいだろう？　美味しい物が食べたい、皆に好かれたい。…恥ずかしい事じゃない。生きる原動力だ」
獣はいつしかエノシラの目前に来ていた。銀の光に吸い込まれて、頭が痺(しび)れて来る……。

次の瞬間、獣は後方へ飛び退(すさ)った。
エノシラの目の横から、緑の槍が水平に突き出されている。
硬直して動けない娘の頭の後ろで、穏やかな声がした。
「…やあ、シンリィ…、待たせたね……」

＊＊＊

シンリィが弾かれたみたいに駆け出した。

槍を構えたままエノシラの横から進み出たのは、水色の長い髪が腰を覆う、ガリガリにやつれた男性だった。シンリィは、そのヒトが折れてしまいそうな勢いで抱き付いた。

「カ…、カワセミ長…様……」

幼い頃何回か見掛けた、三番目の長様。この子供のお父さん。亡くなったって聞いた…。じゃあ…、じゃあ……。

エノシラは全身に冷水を浴びた気がした。

水色の妖精は、槍を獣に向けたまま、片手で子供の髪を撫でている。

「失せろ。ここにいる者は、貴様の欲望の種にはならない」

「ふうん…。本当に、そう言い切れるか？」

獣は、カワセミの眉間をじっと見据えた。

「お前さんだって、逢えるモノなら逢いたいヒトがいる。それも欲だ。ヒトがそういう欲を持ち続ける限り、俺様はいつだってお前等の隣にいる！」

「…それ、違うと思います…」

思いもよらない口出しに、カワセミも獣も、驚きの目で少女を見た。言った本人も驚いたが、どうしても黙っていられず、震え声で続けた。

「もう、逢えないヒトに逢いたいのは……忠禁です！　切ない、望み。欲だなんて、言わないで！」

獣は豆鉄砲食らった顔になり、カワセミは口の端を上げた。

「一本取られたな」

「へ！　つまらん…。つまらん、つまらん！　やってられっか！」

獣は見えない螺旋階段を駆け上がるように上昇して、シュンッと消えた。

痛い所を突かれたようだ。

カワセミは、赤い獣が消えた空から、地面の二つ積まれた玉石へと視線を移した。その下には、カタカゴをまとった女性が眠る。奴も…たまに、何となく、ここへ来るのだろう…。

「こちらも、行くとするか…」

カワセミはシンリィを抱く手に力を入れて、ふわりと浮いた。

「ダ、ダ、ダメェ！」

少女が叫んで子供に手を伸ばそうとした。しかし脚が動かず、つんのめって転んだ。そのまま、うずくまって手を合わせた。

「連れて行かないでください！　その子はまだそんなに小さいのに！　幸せにしますから。あたしが、絶対幸せにしますから。連れて行かないでぇ！」

エノシラは必死で捲し立てた。怖くて顔を上げられない。
…しばらく沈黙があった。
「…ボクが、この世ならざる所から、我が子を連れに来たと？」
「そうでしょう？　その子が、里で厄介者扱いされてるから。でも、ナーガ様はその子を愛しているの。今、その子を連れて行かれたら、一生心に穴が開いたままだわ」
「…シンリィはどうなる？」
「だから、あたしが…」
「どうやって？」
「……」
「確信もないのに、簡単に、幸せにするとか、言わない事だ…」
声が遠くなり、気配が消える。
「ま、待って！」

エノシラが堪らず顔を上げると、そこには水色の妖精も子供もいなかった。
薄桃色の衣装がヒラヒラと玉石の上に落ちる。
エノシラは玉石の上の衣装を掴んで、空に突き出した。
「きれいな服なんか要らない！　一生、何も欲しがらない！だから、その子を帰して！　あたし…あたしが……」
その子が『欲しいモノ』がないのなら、こちらが『あげたいモノ』をあげればいい！
エノシラの頭の中に、色んな想いが駆け巡った。命を大切にしたかった母さん…。母さんが護れなかった子供…。
「あたしが、その子を、護る！　あたし、その子のお母さんに、なる！」

ざざあっっと突風が吹いて、身体を持って行かれそうになった。よろめく…と思ったが、よろめかなかった。腰にしっかり抱き付いている子供がいたからだ。
「あ、あ、あんた……」
風の中、空からかすかな声が降って来る。
「お母さんになるんなら、ちゃんと、名前を呼んでやって…。…シンリィ・ファと……」
声は消えて風は止んだ。
子供は目を閉じてエノシラの服をぎゅっと掴んでいる。
「…シンリィ…？」
子供は目を上げた。
「シンリィ・ファ……？」
見上げる水色の瞳は、空の雲を映していた。
エノシラも同じ空を見上げた。自分の瞳にも同じ雲が映っているんだろう…と、思った。

シンリィは少女から離れて、風に飛ばされた衣装を拾い上げた。差し出された衣装を、エノシラは穏やかに首を横に降って制した。

「あたしが欲しかったモノは、違うの。あたしが欲しかったモノ…。ナーガ様が笑う事…。あんたが笑う事…。叔父様達も、叔母様達も、みんな笑顔でいて欲しい。分かる…？」

そして、シンリィに目線を合わせて、瓦礫の上に座った。

「どうしたら、良いのかしらね…」

シンリィは少しの間小首を傾げてから、エノシラの背後に回った。

「…んん？　どしたの？　おんぶ？」

次の瞬間、シンリィは少女の衣服の背中を掴んで、思いっきり両側に引っ張った。

ビ、ビ、ビビ――！

「きゃああ！　何すんのよ！」

あんまりなイタズラに、驚いて立ち上がった背中の裂け目に、更に子供は腕を突っ込んでぶら下がった。

ビリビリビビビ――!!

「おや…？」

羽毛を辿って、草の馬で空から降りて来たナーガは、ハイマツの丘の上のシンリィと、複雑な顔をした薄桃の長衣のエノシラを見つけた。
「着てくれたんですね。似合いますよ」
ナーガはちょっと笑った。
シンリィは、にぱっと笑った。
この小悪魔ぁ〜〜！
＊＊＊
「…えーと…？？」
ノスリとホルズは上手く呑み込めなくて、三回聞き直した。目の前に、シンリィの両肩に手を置いたエノシラが、胸を張って立っている。
ユーフィの服なんて着てるもんで、『ナーガの贈り物を受け取った』＝『仲直りでラヴラヴ！』・・という図式を勝手に描いて、二人ちょっと浮かれたが、そうでもないみたいだ。
「あたし、シンリィ・ファの『お母さん』になります！」
「…えーと、だから、それって…、ナーガと所帯を持つ…って事？　…だよな？」
「いいえ！」
エノシラは、トンでもないですよねぇ！　と、横で呆然と突っ立っているナーガに、同意を求めた。ナーガだって、さっきハイマツの丘で急にそんな事を言い出したそばかす娘に、困惑している。
「母親代わりをしていた叔母様から、タッチ交代するだけです」
「…ああ…」
ノスリとホルズは何とか納得した。一歩進んだ…？と、見ていいのか？　まあ、悪い事ではない。
「それで、ノスリ長様にお願いがあるのです」
「おう、何でも言ってみろ」

蒼の里の慌ただしい朝。
「ひえぇぇえ〜〜！　遅刻よお〜〜！」
背中に大きな継ぎ当てのある服を着たそばかす娘が、里の奥の道を全力疾走している。その手には、羽根の子供の手がしっかり繋がれていた。
途中、執務室を出て仕事に向かう、髪の毛一本隙のないナーガとすれ違う。
「また、寝坊ですか？」
「起こしてくれるって言ったじゃないですかぁ〜！」
エノシラはその場足踏みし、シンリィも楽しそうにチョコチョコ真似をしている。
「起こしましたよ。パオの外から。返事したじゃないですか」

「耳元で優し～く起こしてやんなきゃ！」
ノスリが混ぜっ返して追い越して行った。

「今の家族から独立して、住む場所が欲しいんです」
そう言ってエノシラは、里の奥の円の焼け跡に住みたいと願い出た。中古のパオでいいって言ったのに、ノスリ長は、新品の小綺麗なパオを設えてくれた。
そうして、ナーガは今まで通り大長の家を守り、シンリィは二つの家を行き来して、意外と上手く収まっている。基本『お母さん』と寝起きし、いるべき時はナーガの側にいる…って感じだ。
「この子はバカじゃあない。やっちゃイケナイ事はやらないさ」
オウネ婆さんはそう言って、弟子がコブ付きで修行に通うのを、あっさり承知してくれた。
お陰で執務室も遠慮なくナーガをコキ使えて、ホルズもホクホクだった。

二人を見送って、ナーガは馬繋ぎ場でノスリに追い付いた。
「危なっかしい二人だな。『お母さん』どころか、子供が二人で暮らしているみたいだぞ」

言っている事と裏腹に、ノスリの口調は穏やかで楽しそうだ。そう、完璧主義のナーガが世話しているより、今のシンリィの方が、何故だか安心して見ていられるのだ。
「元来『お母さん』ってそんなモンじゃないか？　フィフィも毎日上を下への大騒ぎだった。多分……」
ユーフィが生きていてもそんな感じだったんじゃないか…？という言葉は口にしなかった。想い出の中のヒトは大切に胸にしまって、今は目の前の者をしっかり見ていよう。

＊＊＊

「どうしたんですか？　ご機嫌ナナメですね」
風出流山(かぜいずるやま)の神殿。
大長が馬頭琴の調弦をしながら、対面して座っている水色の妖精に話し掛けた。
大長に頼まれて、里へ彼の馬頭琴を取りに行って来たカワセミだったが、帰るなりふてくされて、お茶のカップの柄をクルクル回している。
「久し振りに会って、シンリィも喜んだでしょう？」
「その、シンリィの奴……」
「どうしました？」
「もうちょっと抱っこしていたかったのに。ボクより、女のコ

の方がいいって。女のコが手を広げただけで、ゲンキンに抱き付きに行っちゃってさ…」
「……」
「齢(よわい)ななつで、誰に似たんだか」
「貴方にですよ。決まっているでしょう」
「ボクに?! まさか?!」
「いえいえ、ひとたび心を許した女性への、ベッタリ甘えん坊さん具合といい…」
「……」
カワセミは、罰悪そうに話題を変えた。
「それにしてもナーガって、面食いだと思っていたけど、そうでもないんな。ポッチャリ趣味だったとは」
「そうなんですか? 私も早く見たいです。ナーガのカノジョ♪」

「聞き捨てなりませんね」
蒼の狼がお茶のお代わりを運んで来た。
「女性とお付き合いするなら、まず母親に紹介するのが筋でしょう? そんなフシダラな子に育ててはいませんよ」
シンリィが、馬頭琴を持ち出して来たついでに、里の外へ導いて、カワセミに見せてくれた女のコは…、
「ナーガには勿体ない位、良くデキた子だったョ!」と言う事だった。
「もう、『フシダラな子』って歳でもないでしょう」
「親にとって、子供はいつまでも子供です!」
ユーフィに対しては緩(ゆる)かった癖に。まったく、男のコの女親って奴は…。
「紹介するったって、普通の女のコ、こんな雪山の神殿に連れて来て、そんな感じで迫ったら、ドン引きされるよォ」
「……」
「ボク達が留守番しててあげるから、見に行って来たらぁ?」
シンリィが選んだ『お母さん』だから、間違いはないけれどね」

～受け取ったモノ～

縁起を担ぐ里の老人の幾人かは、産婆の所にシンリィが出入りするのを、口塞がなく批判した。
「なんの、言わせておけ」
心配するエノシラに、オウネ婆さんは、余計な気を回す暇があったら自分の勉強に専念せい! と一喝した。
「あんな状況でこの世に来て、未だ命を長らえているこの子供は、お産の守り神でこそあれ、運気を下ろすモノなどであるも

のか」
そう言いながらもシンリィと接して、自らの変化にも気付いている。
ユーフィの出産に立ち会ったのは、自分と師を同じくする先輩産婆だったが、彼女もエノシラの母と共に隔離所の看護に加わり、今は居ぬヒトだ。
彼女があの後ショックで沈み込んでいたのは、目の当たりにしている。自分だって同じ状況に遭ったら清しい采配が出来るかと、常々不安に思っていた。
シンリィに会って、この子供がエノシラや、ナーガや、色んな大人に何らかをもたらしているのを見て、ああ、生まれて来て無駄な命なぞ一つも無い…！　と、改めて自分の仕事を誇りに思えたのだった。

執務室のホルズも最近、ちょっぴりの変化があった。
お産や診察でオウネ婆さんの所を閉め出されている時、シンリィがちょこちょこっとやって来るのだ。
言葉も通じず、澄んだ目を真っ直ぐに向けて来る子供を、ホルズは、他の里の大人と同様、苦手に思っていた。
「呑気な奴だな…」
長椅子に収まって、羽根の先っぽをいじくっている子供を眺めていて、不意にデジャヴな感覚に襲われた。
「…昔の執務室…」
大机の父の横で、子供だったナーガが雑務を手伝い、カワセミ長はその長椅子で羽根をだらしなく投げ出して、いつも疲れてノビていたっけ。まだ弟子だった若造の自分は、そんな暖かな安心出来る執務室が、大好きだった。
長としての能力には欠ける自分が大机を預かっているのは、父が、亡くなったツバクロ長の代わりに、飛び回らねばならなくなったからだ。
人数が減って、執務室はカツカツで余裕もない。自分の憧れの場所は、二度と戻りはしない…、と思っていた。

「無くなったモノを惜しむのではなく、新たにこれから作ればいいんだよな…」
フッと口を付いて出た。
言ってしまってから我に返ると、長椅子の子供が例の澄んだ目で見つめていた。しかしその時は少しも苦手に思わなかった。
ああ、自分はこの子供を苦手だったのではなく、自信のない自分が嫌だっただけなんだ…。別に忙しいのが変わる訳ではないが、ホルズの心に、ちょっぴりの余裕が出来ていた。

一仕事終えて、里に戻った上空から、ノスリは里の奥の新しいパオを視界に入れた。
「あすこにまたヒトが住む日が来るとはな…」
何故あそこに住みたいかと言う問いに、何も知らない筈の少女の答えは、ノスリの心臓を止めそうになった。
「生命の始まりの力が流れているからです」
「…なんで！　そう思うっ？」
「え？　だって、シンリィはあそこで生まれたんだもの…、だから…」
何となく言った言葉に食い付かれてエノシラは戸惑った。
「……」
彼女は意識せずとも、『何か』が、言わせたんだ…。ノスリは一人密かに想って呑み込んだ。

執務室に戻ると、ホワッとした。
「親父、お疲れ」
「…んん？」
「どした？」
「いや…、何となく…、雰囲気違うな？　何か変えたか？」
「いや、別に？　ああ、シンリィが、午後一杯手伝ってくれた」
「シンリィが？」
「大した事じゃないよ。整頓したり、お茶入れたり。やって見せれば、飲み込みは早いよ、アイツ」
「ほお…」
ノスリは長椅子の上の一枚の羽毛を拾い上げた。
思えばあの子供は、大人達がもて余して疎んじるのを聡く感じて、居場所を捜して里をさ迷っていたのかもしれない。
薄緋色の羽根をクルクル回すと、なんだか暖かくなった気がした。
「ここもお前さんの居場所の一つになったか？」

＊＊＊

エノシラは不思議に思う事がある。
自分の周りの環境は多少変わったが、自分は大して変わっていないと思う。相変わらずドジで物覚えが悪くて、オウネ婆さんに怒鳴られっ放し。
『お母さん』をやっているつもりなのだが、しょっちゅう寝坊したり、物をこぼしたり壊したり、洗濯が乾かなくて、シンリィと二人で明日着る物を竿に付けて振り回したり。立派なお母さんからは、多分三千里くらい駆け離れている。
でも何だか、里の者達から、妙に一目置かれている。おそらく皆、何か過大に期待しているんだ…。不思議なの…、あたしの凡庸さは何にも変わっていないのに…。

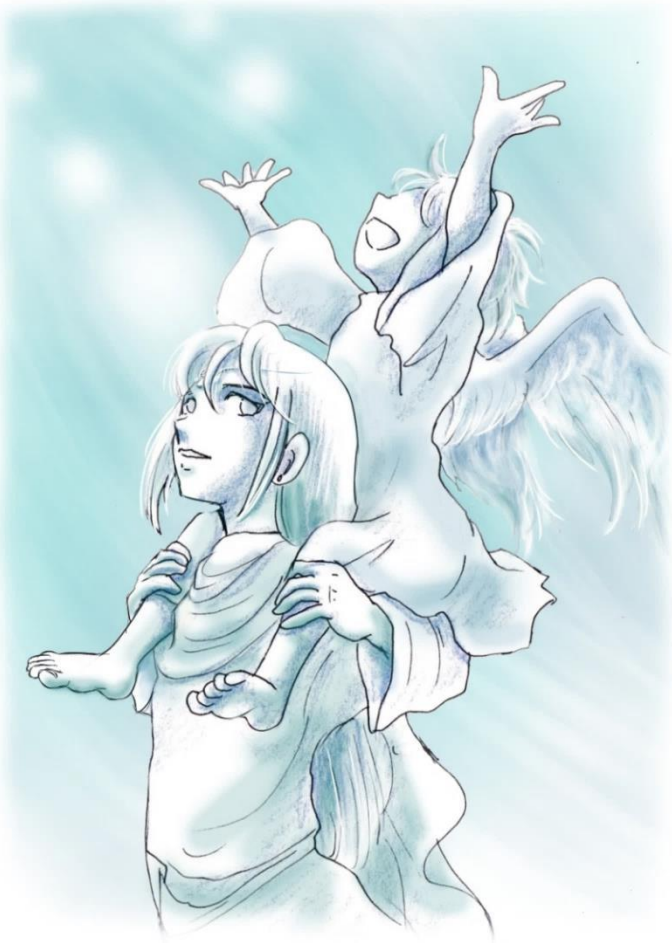
先だって、例の厩の子供達に会った時も…、彼等はキチンと並んで、大人に対する挨拶をしてから、話し掛けて来た。以前とは偉い違いだ。
「あの羽根の子、元気?」
「ええ、元気よ」
「あの子、修練所に来ないの?」
「言葉を覚えてから、って思っているの」
「いつ、覚えるの?」
「……」
「ねえ、言葉が分からなくても、出られる授業あるよ。体操とか、技工とか」
「あら、あんた達はシンリィを修練所に迎えたいの?」
「うん、俺達の教官センセが…」
「教官さん?」
「サォセンセ。俺達と蹴り玉遊びもしてくれる。そのセンセがね、あんたが羽根の子供を引き取った話を聞いて、何か、感激しちゃって」
「ええっ?」
「里の皆は家族だって」
「まあ……」
「自分も子供の時のセンセに、そう言って大事にして貰った事を思い出したんだって。センセ、お母さんいないんだけれど、そのセンセをお母さんだと思ってたって。だから自分もセンセになったんだって。そういうのを、思い出したんだって」
「そうなの…」
「長かったよな、センセの説教」
「うん、熱かった」
「暑苦しかった」
「でも、俺等、センセ好きだから、乗ってやる事にしたの」
「あら、まあ…」
子供達の動機はともかく、シンリィを受け入れようと思ってくれている教官がいるみたいだ。今度、半日お休みを貰って、シンリィと修練所へ出向いてみよう。
そんな風に、ちょっとづつ自分の周りは変化している。でもやっぱり自分は大して変わっていないと思う。

もうすっかり夏草の放牧地を、ナーガはゆっくり歩いていた。前の方を、シンリィが羽根を少ぅし膨らませて、ツーステップで跳び跳ねながら歩いている。まったく、エノシラといると、思いも寄らない動きを会得して来る。
金鈴花はもう終わって、今は所々にカンゾウのオレンジがポ

ツポツ見える。久し振りに明るい内に仕事が終わったので、執務室にいたシンリィを伴って、こちらまで来てみたのだ。
思えば、『やらなければイケナイ事』に追われて、こんな風に、シンリィとそぞろ歩く気分になったのは、初めてかもしれない。色んな意味で余裕が出来たお陰だが、ずっと張り付いていた時より、シンリィが近くにいる気がする。

牧場(まきば)には、あどけないクリクリ目の当歳馬が、三々五々遊んでいる。懐っこい仔馬に鼻を寄せられて、シンリィは嬉しそうに鼻を押し付け返している。
「馬は好きかい?」
振り向いて片えくぼを作ったシンリィは、馬の背中に触ってナーガを見た。
「駄目だよ。当歳達は、まだヒトを乗せる程大きくないから」
ちょっとガッカリ顔な子供に、ナーガは生まれて初めての感情が湧いた。
「ね、シンリィ」
しゃがんで自分の両肩を子供に示す。
よく分かっていないシンリィの後ろに回って、足の間に頭を突っ込んで持ち上げた。
初めての経験。ナーガも、シンリィも。
ガタイのでかいノスリに比べたら、ちょっとヨロけ気味の頼りない肩車。
いきなり視界の高くなったシンリィの興奮が、体温で伝わる。
「ハァ!」
子供は感嘆の声を発して、空に向かって両手を突き出した。
「シンリィも馬に乗れるようになろうな。僕の肩よりずっと気持ちいいぞ」

ナーガはゆっくり歩き出した。子供ってこんなに甘い匂いがするんだな…。心のどこかが温まり、今まで凍り付いていた部分が、溶け出して流れる気がした。
「シンリィ、お前のお母さんは…」
肩の子供がじっとナーガの言葉に心を預けているのが分かる。
「お前のお母さんは…、里で一番馬に乗るのが上手な子供だったんだ。だから、お前もきっと上手に馬に乗れるようになるよ」
ずっと封印していた妹の顔を心に思い浮かべた。
何故か一番覚えているのは、シンリィと同じ位の、里へ来たばかりの頃の妹だ。
「それと、お前のお母さんは…、太陽みたいで、大輪の花みたいで、ヒトを幸せにして…。僕は、そんな妹が、羨ましくて……」
言葉が頭を通さないでサラサラと流れ出て来る。シンリィは



ナーガの肩で揺られながら、大人しく聞いている。
「羨ましくて、憎たらしくて……・・大好きだった…！」

土手を登った所でナーガが立ち止まり、しゃがんだので、シンリィは羽根を広げてフワリと前に降りた。
振り向いた子供が見たのは、片膝着いたままのナーガの、飾りのない情けない顔だった。
「ごめんな…、護れなくて……ごめんな……」
小さな両腕がナーガの頭を抱いた。
暖かい懐…。
暖かい心……。
風が、丈の高い夏草を撫でて、波のようにうねらせた。
今、確かに何かを受け取った…。
草の海の中、ナーガはゆっくり立ち上がる。愛しい者の手を、今度こそ離さないよう、しっかり繋いで。

〜おしまい〜

二〇一〇・三・五